緋弾のアリア　～飛天の継承者～

ファルクラム

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
緋弾のアリア　～飛天の継承者～

【Ｎコード】
Ｎ７３４８Ｚ

【作者名】
ファルクラム

【あらすじ】
東京武偵校に通う緋村友哉は、かつて最強の維新志士と呼ばれた剣客の子孫。そんな彼が武偵活動中に奇妙な事件に巻き込まれる。初投稿になります。少々、リアルで忙しいので投稿に関しては不定期になりると思いますが、どうかご容赦ください。ストーリーは基本的に原作沿いとして、あまり大きくは外れないようにしたいです。尚、クロスさせるに当たって「るろ剣」側のキャラに関しては原作キャラをそのまま登場させるのではなく、彼等の子孫と言う事にしていきます。その方が「アリア」っぽいと思ったので。それでは、

宜しくお願いします

人物設定

・緋村友哉
１６歳　男
所属：東京武偵校強襲学部強襲科２年
武器：日本刀（逆刃刀）×１

備考
幕末の維新志士の中で最強と呼ばれた「人斬り抜刀斎」の子孫。性格は穏やかで人当たりが良い。外見は中性的で少女のような顔立ちをしている。剣術の腕は相当な物だが、基本的に銃は使わない。飛天御剣流の技は伝承にある物を再現しただけなので全てを使う事はできない。

・四乃森瑠香
１５歳　女
所属：東京武偵校諜報学部諜報科１年
武器：イングラムＭ１０×１　サバイバルナイフ×１

備考
友哉の幼馴染であり戦妹の少女。明るい性格で、どちらかと言えば天然系の友哉に対する突っ込み役でもある。江戸時代、将軍家に仕えた御庭番衆の末裔であり、高い身体能力と情報収集能力を持つ。

第1話「かくて黎明に幕は上がり」

1

まだ車も人も少ない朝の街を、１台のバイクが爆音を響かせて駆け抜ける。

型は通常のレーサータイプの物だが、貸してくれた車輌科の友人がエンジン回りを入念に改造してくれた為、最高時速は２００キロ近く出せる。最早、羽を付ければ空を飛べるレベルだ。並みの複葉機よりも速い。

もっとも、日本の公道でそんな化け物じみたスピードを出せば、事故る以前に警察がすっ飛んで来る事になる。いかに大義名分があるとはいえ、そこまで冒険する気にはなれない。

とは言え、急ぐ必要がある事に変わりはない。

緋村友哉はフルフェイスヘルメットの中で目を細め、ハンドルを握る手に力を込める

通報を受けたのは１０分前。ここ数日追い掛けていた案件が、ようやく、こちらの放った網に掛かってくれた。

《急いで友哉君、もう取引が始まっちゃう》

フルフェイスヘルメットの内側に仕込んだ通信機から聞こえて来たのは、後輩であり戦妹でもある少女の声。諜報能力に長けた彼女が先行して情報を集め、自分は寮で待機。即応状態を作っておく。と言うのが作戦の骨子だが、やや出遅れた感は否めない。

連中の動きをなかなか掴む事ができず、結局昨夜は一睡もできなかった。

だが、それで疲れているかと言われれば、そんな事はない。むしろ、一晩中気を張り詰めていたおかげで、精神が研いだ剃刀のように鋭利になっているのが自分でも判る。

「判ってる。こっちはあと3分で現着予定。その間に大きな動きがあったら教えて」

《了解だよ！！》

叩きつけるような声が耳に響く。

あんな大きな声を出して、敵に見つかったりしないだろうか。と、少し心配になる。まあ、彼女は身軽だし、仮に見つかったとしても捕まる可能性は低いだろう。

そう心の中で呟きながら、速度を僅かに上げる。

スッと、心の中が落ち着く気がした。

気が付けば、周囲に流れる光景も、バイクの音も気にならなくなる。

戦場に赴く時はいつもこうだ。普通なら緊張するか、気持ちが高ぶるかのどちらかだと思うのだが、自分の場合、なぜか気持ちが落ち着いてしまう。

良い事か悪い事かと言われれば、間違いなく良い事であるのだろうが。それでも、我ながら不思議な感覚である。もしかしたら、これもまた自分の持つ「血」のなせる技なのかもしれない。

そうしている内に、目的の場所が見えて来た。

場所は東京港大井コンテナ埠頭。この場所で取引が行われる事を調べるのには随分と労力を払った。

立ち並ぶコンテナを縫うようにバイクを走らせ、一気に目標となる場所まで走り抜けた。

そして、

「あれかっ！！」

7～8人の男達が岸壁に立って、手に持ったケースの中身を確認している。遠目にも、それが何か白い物を入れたビニールの袋である事が判る。

と、そこで向こうも走って来るバイクの存在に気付いたのだろう。

ぎょっとした様子で振り向くのが見えた。

ブレーキを掛け、後輪を横に傾けながらバイクを停止すると同時に、ヘルメットを取る。

一本にまとめた長い赤茶髪の下から、思わず見とれそうになるほど端正で中性的な顔立ちをした少年が姿を現した。体付きも細く、外見だけ見れば少女と言っても通りそうである。

友哉は左手で制服の内ポケットに入っている手帳を抜き取って開く。

「武偵だ。麻薬及び向精神薬取締法違反の容疑で全員逮捕します！！」

全員が慌てたように銃を引き抜く。予想はした事だ。これで罪状は追加。銃砲刀剣類所持等取締法違反だ。

日本の銃規制も一時代前に比べてだいぶ緩くなった。こうして事件現場に出るたびに銃装備した連中に出会ってしまう。

友哉はバイクから飛び降り、同時に膝を撓めて跳躍の姿勢に入る。

真横に飛び退くのと、敵が引き金を引くのはほぼ同時だった。

しかし、弾丸は全て、残像を掠めるかのごとく命中しない。

全員の目が、驚愕に見開かれるのが見えた。

着地。同時に、友哉の右手は背中にまわされ、そこに背負ってい

る物を掴んで一気に抜き放つ。

昇りかけの朝日に、銀の刃が鋭く反射して輝く。

浅く反った細身の刃に、鉄拵えの柄。その優美な外観は、それが殺傷を目的に作られた代物である事を一瞬忘れさせるほどに心をひきつける。

手にしたのは一振りの日本刀。ただし、通常の物と比べると、峰と刃が逆になっている。

逆刃刀と呼ばれるこの刀は、通常通りに振っても相手を殺す事はない。まあ、当たれば骨の2～3本は折れるだろうが。

次の瞬間、友哉は地を蹴って距離を詰める。

機先を制するのは、この流派の剣術にとって必須である。故に求めるは、究極の先の先。常に相手より速く、相手より先に動くのだ。

銃口が慌てたように友哉を向く、が、遅い。

その時には既に、友哉は間合いの内側に踏み込んでいた。

着地すると同時に、剣閃を下から斬り上げる。

ゴッ

鈍い音と共に、相手の顎を切っ先が捉えた。

強烈なアッパーカットを食らったに等しいその男は、手にした銃

を取り落としてあおむけに倒れた。

まずは1人。

倒れる敵を確認しながら、次の目標に視線を向ける。

トランクケースを持っている男が背中を向けて逃走するのが見えた。

その様子に、友哉は口の中で舌打ちした。

追おうにも、残りの敵が友哉の動きに気付き一斉に銃口を向けて来る。そちらに背を向けて追う事はできない。

友哉は視線も鋭く、敵を睨み据える。

元が一対多数戦闘を目的とした流派の剣術だ。この程度の敵の数など問題にならない。

踏み込むと同時に、刃を水平に倒して一閃する。

振るった刀が、2人の男の胴を一撃で薙ぎ払った。

「グアッ！？」

「ギャッ」

一閃で2人同時に薙ぎ払う。しかも、1人目と2人目でぶつけた威力は殆ど変わらない。

倒れる男達。

「よし、次っ」

更に斬り込むべく、刀を構え直す友哉。

対して残った男達も、銃を放ってくるが、こちらのあまりのスピードに殆ど照準を付けられない様子だ。放たれた弾丸は全て明後日の方向に飛んでいく。

その間に、悠然と距離を詰めて刀を振りかぶった。

「このっ、相手は1人だぞ。もっと落ち着いて狙え！！」

リーダー格と思われる男がはっぱを掛けながら銃で応戦して来る。

敵は既に、当初の半分近くにまで減っている。このまま押し切る事は充分に可能だろう。

残った敵が盛んに銃を撃ってくるが、それが命中する事はない。全ての弾丸は友哉が駆け抜けた後を空しく通り抜けるだけだ。

反対に、友哉の剣は確実に敵を無力化していく。

「くっ、クソッ！！」

残りはリーダー格と思しき、ケースを持った男1人だけ。その男も、もはや破れかぶれとばかりに銃を向けて来るだけだ。

トランクを持った男がコンテナの間を縫うようにして走って行く。
大事に抱えたトランクの中には、末端価格で数億円にもなる量のコカインが入っている。今回の取引が成立すれば大金が入る事は間違いなかったのだ。

それなのに、

「何で武偵がかぎつけやがるんだよ！？」

とにかく走る。このトランクさえ無事なら再取り引きは充分に可能だ。何しろこれだけの量だ。裏でほしいと言う連中はいくらでもいる。

そう思った時だった。

「逃がさないよ！！」

鋭い声と共に、上空から飛びかかって来る影が目に入った。
髪を短く切り揃えた小柄な少女は、短いスカートをはためかせて急降下して来る。

男が一瞬振り仰ぐ。

しかし、遅い。

コンテナの上から跳躍した少女が、手にしたマシンガンを一連射。

放たれた弾丸は、男の膝に命中する。

「グアッ！？」

足を押さえて倒れる男。同時にその手からトランクケースが放り出され、中に入っていたビニールに包まれた白い粉が地面に散乱した。

「クッ、くそっ！！」

痛む膝を押さえ、それでも散らばったコカインの袋を集めようと手を伸ばす。

しかし、その腕を踏みつけられ、同時に鼻先に銃口を突きつけられた。

「無駄だよ。いい加減諦めなって」

東京武偵校の臙脂色の制服を着た少女は、そう言って不敵に笑った。

うなる銃撃音が少なくなっている。

敵は既にリーダー格と思しき男が一人だけという状態になっていた。他の者は全員、友哉の剣によって叩き伏せられ、地面に転がっ

ている。

その残る1人を仕留めるべく、友哉は更に刀を構えて斬り込む。

だが、流石はリーダーと言うべきか、盛んに拳銃を撃ち、接近の隙を与えてくれない。

今日日、防弾服の軽量、高性能化に伴い、拳銃は一撃必殺の遠隔武器ではなくなった。それ故に、その高初速、大威力を利用した打撃武器としての使用、近接拳銃戦、通称「アル＝カタ」が発展を遂げている。

友哉が着ている武偵校制服もまた防弾線維で編まれた物である。が、銃弾の打撃力は拳などとは当然比べるべくも無く、一撃食らえば昏倒してしまう事もあり得る。

友哉と対峙している男もまた、そのアル＝カタの使い手であるらしい。ある程度型にはまった動きと洗練された動作は、軍か警察の経験者、あるいは元武偵である事が窺える。

その銃口が、真っ直ぐに友哉に向けられた。使っている銃は旧ソビエト製軍用自動拳銃トカレフＴＴ３３。安全装置が無く、そのハイパワー振りから暴発事故が多い事で有名な銃だが、低コストが相まって、今でも多くの組織の末端構成員に愛用されている。

「死ねェ！！」

対して友哉は、その銃口を冷静に見据えて駆ける。

距離にして約8～9メートル。今から距離を詰めて斬りかかるに

は、僅かに時間が足りない。

だが、慌てる必要はない。

銃口と目線の向き、反動で腕が跳ね上がる瞬間のタイミング。それさえ見逃さなければ、弾丸の軌道を読む事はそう難しくない。

そして、

轟音と共に発射される弾丸。

次の瞬間、

残像すら残る勢いで、友哉の体は更に加速した。

神速とも言える身ごなしが可能であるならば、銃は決して恐るべき兵器とは言えない。

「なっ！？」

一瞬目を剥くリーダー。対峙している彼には、正に友哉の体は消えたようにも見えた事だろう。

次の瞬間、友哉の姿がリーダーのすぐ真横に現われた。

リーダーはまだ、友哉の動きに気付いていない。

友哉の体が半回転する。その勢いのまま、逆刃刀を一閃。回転の威力を刃に乗せて叩きつけた。

「グァァァッ！？」

背中に剣撃を受け、リーダーは一瞬背をのけぞらせるように硬直した後、前のめりに倒れ込んだ。

これで終了。

友哉は背中の鞘を取り外すと、逆刃刀を収めた。

「お疲れ様、友哉君」

振り返れば、トランクケースを片手に持った少女が歩いて来るのが見えた。

短く切ったベリーショートの髪に、俊敏さを思わせる小柄な体。少女と言うより腕白盛りの少年と言った風情がある。

四乃森瑠香は友哉の傍らに立つと、ニコッと人懐っこい笑みを見せた。

「はい、これ。中身は全部確認しといたから」

そう言ってコカイン入りのトランクケースを差し出す。

「逃げた1人は？」

「縛ってあっちに転がしといた。車輌科の車が来てくれたら回収に行かないとね」

諜報科に所属する瑠香は、直接的な戦闘よりも情報収集、先行偵察に向いている。その為友哉は、今回の作戦に際して、瑠香に取引

情報を探ってもらったのだ。

その時だった。

「いやぁ～、実に素晴らしい。これほどの剣の使い手が武偵にいるとは驚きですよ」

突然の声に、友哉は刀の柄に手を掛け、瑠香はマシンガンを抜いて銃口を向けた。

振り返った先。

そこには、スーツ姿に無機質な仮面を付けた痩身の男が立っていた。背格好からして２０代から３０代と言ったところではないだろうか。あまりにも自然と現われた為、気配を感じる暇すら無かった。

友哉は刀をいつでも抜けるように、腰を落として抜刀の構えを取る。

『この男・・・・・・』

友哉は先程まで感じなかった緊張感を感じる。

男はあまりにも自然に現われた。否、あまりにも自然すぎた。つい最前まで剣撃と銃撃が飛び交う戦場であったこの場所に、である。

瑠香も男の異様な雰囲気を感じているのか、銃口を一瞬も逸らす事ができず硬直している。

だが男は、刀や銃が見えていないかのように悠然と振舞っている。

そこで、先程友哉が倒したリーダー格の男が、痛む体を引きずるようにして顔を上げた。

「テメェ、『仕立屋』ッ！！　よくも裏切りやがったな！！」

激昂するリーダーに対し、仕立屋と呼ばれた男は差も心外だといわんばかりに振り返ってみせた。

「おや、『裏切った』とは？」

「とぼけるなッ　何で助けてくれなかったんだよッ！？」

「ですから、私は何度も御忠告を申し上げた筈ですよ。計画があまりにもずさんすぎるから、見直した方がいいと。それを強行したのはあなた達の方じゃないですか」

その言葉に、リーダーは黙りこんだ。

そんな2人のやり取りを、友哉と瑠香は黙って聞いている。

仕立屋。聞いた事のない名前である。しかし、こうして容疑者と話している以上、今回の件に何らかの形で携わっているのは間違いないだろう。

それに・・・・・・

刀を握りながら、友哉は男を注意深く観察する。

一見すると、武術の心得の無い、ただ怪しい仮面を付けただけの男に見える。しかし、そのあまりにも無防備な立ち居振る舞いが、逆に友哉に警戒を解く事を留まらせていた。

そうしている内に、男はリーダーから興味を失ったかのように友哉の方を見た。

「まったく、仕立て甲斐の無い人達ばかりで困ったものですね～。それに比べて、」

仮面越しの視線が、真っ直ぐに友哉に向けられた。

「あなたは、実に素晴らしい。そして可憐だ。武偵のお嬢さん」

その言葉に、友哉は状況も忘れて思わずため息をついた。

まあ、いつもの事と言えばいつもの事なので、今更嘆きもしないが。

「あの、僕、男なんですけど」

その言葉に、男も驚いたように肩をすくめた。

「これは失礼しました。あまりにもお美しいので、つい」

「まあ、良いですけどね。馴れてるから」

敵味方、場所と状況を忘れて随分とのんきな会話を交わしてしまう。

「では、改めて。私は由比彰彦と申します。知人からは『仕立屋』などと呼ばれております。以後お見知りおきを。それで、君の名前は？」

「・・・・・・緋村友哉です」

「なるほど、緋村君ですか。憶えておきましょう。機会があれば、ぜひ、私の仕立てにお付き合い願いたい物です」

そう言うと、身を翻す彰彦。

「ま、待て！！」

追い掛けようとする瑠香。

だが、駆けだそうとする少女を、友哉は片手を上げて制した。

背中を向けた彰彦を、友哉は追う気にはとてもなれなかった。

倒した犯人達を放置する訳に行かない。と言うのは勿論あるが、それよりも、追い掛けて確実に勝てるという確証が持てなかったのだ。

「・・・・・・・・・・・・・」

刀から手を放す。とにかく今は、取引を未然に防げただけで良しとしておく事にした。

傍らでは瑠香が、いかにも不満だとばかりに頬を膨らませている。

そんな彼女に笑い掛けながら、頭をなでてやる。

ちょうどその時、埠頭の反対側から1台の護送車が見えた。どうやら、容疑者護送用の車輌科が来てくれたようだ。

これにて事件解決。しかし、どうにも後味の悪い終わり方になっ

てしまった。

「由比彰彦・・・・・・仕立屋、か」

あの男はいったい、何者なのか。結局判らず仕舞いであった。

何とも、喉の奥に棘が刺さるような感覚が抜けない。仕事は終わったと言うのに、緊張が解けない。まるで、これから更に大きな事が起こる前兆であるかのように、友哉は漠然と、しかし大きな不安を拭えずにはいられなかった。

第1弾「かくて黎明に幕は上がり」　　終わり

第2話「何やら騒がしくなってしまった日常」

1

武偵。

その本来の語源は、読んで字の如く「武装した探偵」に由来する。日々、凶悪化の一途をたどる犯罪者の群れに対抗する為、各国政府は司法、軍、双方に属さない独自の行動性と機動力、戦闘力を兼ね備えたライセンスを新設した。それが武偵である。

武偵は刀剣、銃火器による武装を公式に許可されていると同時に、凶悪犯罪者に対する捜査、逮捕権を有すると言う、警察に準じた権限が与えられている。警察との違いは、ある程度組織に捕らわれず独自の行動が推奨されている事、上からの指示や命令に従う必要はなく、依頼によって行動する「便利屋」の側面がある事である。

そして武偵を育成する為、世界には数多くの武偵養成校が存在している。

レインボーブリッジの南に浮かぶ南北2キロ、東西５００メートルに及ぶ巨大な人工島。通称「学園島」。この人工島にある東京武偵校もまた、そうした武偵育成機関の一つである。

存在する専門学科は、強襲科、狙撃科、探偵科、鑑識科、諜報科、尋問科、車輌科、装備科、通信科、情報科、救護科、衛生科、超能力捜査研究科、特殊捜査研究科の１４。それぞれに在籍する学生は一般科目の他に、これらの専門科目の受講も行う事になる。また、学生によっては既に犯罪捜査の一線に立って戦っている者も多い。

それら、特殊技能の習得を目指す半面、武偵校の偏差値は一般校に比べて低い事で有名である。勿論、中には例外的に全国でもトップクラスの成績を誇っている学生も存在するが、それは例外中の例外であると言える。彼等武偵に必要なのは、あくまで戦闘力や捜査能力、それらを補助する能力であって、一般教養など社会に出て恥ずかしくない程度に身に着けていれば良い、と言う訳である。

その武偵校も今日が四月の始業式となる。臙脂色の防弾制服に身を包んだ学生達。１年生は新しい学び舎に期待と緊張感を募らせ、2、3年生は新たな気持ち、新たな学友と共にこれからの一年に思いを馳せる。そんな光景は武偵校も一般校も変わりがない。

緋村友哉は強襲学部強襲科2年に所属している。

強襲科は武器を使用した戦闘術を主に学ぶ学科であり、将来的にもそうした荒事を本職とする職業につく事になる。斬った撃ったは日常茶飯事であり、その為、卒業までの生存率が１００パーセントに満たない。「明日無き学科」とはよく言ったものである。気の合う友哉の友人などは昔のアニメに倣ってか「死ね死ね団」等と言っている。

始業式を終えた友哉は、流石に眠気に勝てなくなり、机に突っ伏した。

昨夜は一睡もせず、更に今朝の大立ち回りである。緊張を保っている内は良かったが、緊張の糸が途切れた瞬間、眠気はどっと襲って来た。

あの後、車輌科に容疑者達を引き渡して護送を依頼してから、瑠香をバイクに乗せて学園島まで戻ってきた。

寮に戻るとシャワーを浴びて着替えを終え、寝不足で悲鳴を上げる胃袋に、何とか軽めの食事を入れてから登校した。その時点で学校へは行かず、そのままベッドに倒れ込みたい衝動にかられたが、始業式の日からそんな事をする訳にもいかず、眠気を訴える体を引きずって何とか登校したのだ。

辛うじて始業式の間は眠る事無く過ごせたが、ここらが限界だった。

ホームルームが始まるまで少し眠ろう。そう思って意識を手放しかけた時、

ドゴォッ

「起っきろォ、ユッチー！！」

「おろォッ！？」

突然、背中に激烈な衝撃を受け、眠りの園の扉は一瞬にして閉じてしまった。

顔を上げると、前席の女子がにこにこと笑いながら友哉の背中に全体重を掛けた肘鉄を入れている所だった。

長い金髪をツーサイドアップにした、小柄な少女である。着ている制服は彼女独自の改造が施され、ロリータ風のフリルがふんだんにあしらわれ、原形を見失っている。

友哉が恨みがましい目でにらでも、相手はどこ吹く風とばかりに顔に笑顔を張り付けている。

「・・・・・・理子」

「クフフ、おはようユッチー。始業式の朝から居眠りなんて随分と大胆だねェ」

そう言って峰理子は、楽しそうに笑う。探偵科に所属している女子で、友哉とは1年生の時から同じクラスであった。

底抜けに明るい性格からクラスのムードメーカー的な立ち位置にある理子だが、時々、こうして少し過激ないたずらを仕掛けて来る。

「あのね、少しは眠らせてよ。こっちは朝から大変だったんだから」

「聞いてるよ、大活躍だったんだってね。理子、ユッチーの武勇伝、詳しく聞かせてほしいなあ」

「いや、だから、僕、眠いんだけど・・・・・・」

「いやー、拳銃振り回す奴ら相手に、ポン刀一本で立ち向かうユッチー。かっこいねー!!」

ダメだ。会話が成立しない。理子の、この底抜けに明るい性格は嫌いではないが、こうした時かなり困る。

ちなみにユッチーと言うのは、理子が友哉に付けたあだ名である。

溜息をつきながら教室内を見回す。

今日から新しいクラスメイト達であるが、中には見知っている人間も何人かいる。

だが、クラス表が発表になった時、名前があったはずの人物がいない事に気付いた。

「あれ、そう言えばキンジは？」

何度探しても、顔なじみの男子生徒の姿は無い。

遠山キンジは昨年まで友哉と同じ強襲科の学生だったのだが、今は探偵科に転科してる男子である。発表では同じＡ組であるとの事だったのだが。

「キーくん？　そう言えば来てないね」

理子も今日はまだ会っていないらしい。始業式からボイコットとは、なかなか度胸がある。こっちはわざわざ間にあわせる為に急いで依頼を片づけたと言うのに。

などとこの場にいない友人に、心の中で恨み事を呟いていると、急速に意識が沈降していく。

もうダメだ。

目が回るような眠気と共に、頭が枕を求めて机に落下する。

理子が何度か呼びかけて来たのは意識できたが、最早起き上がるだけの力は残されていなかった。

そして、意識は実に呆気なく、友哉の手元から離れた。

・・・・・・・・・・・・・・・

・・・・・・・・・・・・・

・・・・・・・・・

・・・

ズキューン！！　ズキューン！！

「お、おろッ！？」

突然の轟音に、眠りの深海にいた意識が一気に覚醒した。

あれだけ苛んでいた眠気は綺麗サッパリ消えうせている。

周りを見回せば、クラスの全員が着席し、壇上には担任の高天原ゆとりが立っている。どうやらホームルーム中だったらしい。と言う事は、眠っていた時間はせいぜい１５分くらいだろうか。

だが、どうした事か、先生もクラスメイト達も、一言もしゃべらずに硬直している。

そう言えば、覚醒直前に聞いた音、あれは銃声だったような気がする。

と、前の席の理子が、両手を上に掲げた「ホールドアップ」状態を保ったまま、ずるずると自分の椅子に腰を下ろした。

と、

「恋愛なんて、くっだらない！！」

突然、甲高い叫びが聞こえ振り返ると、教室の真ん中にピンク色の長い髪をツインテールに縛った少女が、両手に２丁のコルト・ガバメントを握って立っていた。

かなり小柄な少女だ。目の前で震えている理子も小柄だが、少女はその理子と比較しても小さい。黒板には「神崎・Ｈ・アリア」と書かれている。これが名前なのだろう。と、言う事は転校生なのだろう。

どうやら発砲したのは彼女らしい。常時帯銃帯剣を義務付けられている武偵校の生徒にとって、校内での発砲は「できれば禁止」されているだけで、別に発砲したからと言って処罰の対象となる訳ではない。

一方、

友哉は少女と対峙している男子生徒に目を向けた。

何処か影のある少年。背は友哉よりも高く、目つきもやや鋭い感じがする。

こちらは、先程、理子との会話に出て来た遠山キンジだ。去年まで同じ強襲科にいて、友哉は結構気が合う仲だった。昨年2学期のテストをボイコットしたため、現在でこそ探偵科のEランクであるキンジだが、強襲科を受験した際には実技で教官を倒した事で、半ば伝説化していた。

で、

一体何がどうなって、少女とキンジが対峙し、朝っぱらから発砲事件にまで発展したのか、今の今まで居眠りしていた友哉には事態が全く掴めなかった。

「全員憶えておきなさい。そんな馬鹿な事言う奴は・・・・・・」

そしてアリアは、顔を真っ赤に染めて宣言した。

「風穴開けるわよ！！」

2

一通りのカリキュラムを終えると学生達はそれぞれ帰宅の途につ

く。

武偵校には自宅が都内にあり、そこから通っている者もいるが、遠方から通っている者も多くいる為、そう言った者達が寝起きする為にいくつかの寮が設けられている。

友哉が暮らす第3男子寮も、そうした寮の一つだ。

「はあ、そんな事があった訳」

「まったく、初日からヒデェ目にあったよ」

友哉の隣を並んで歩きながら、キンジはガリガリと頭を掻く。

寮の部屋の隣同志である友哉とキンジは、こうして登下校が一緒になる事がある。

「その、セグウェイとUZIを使った犯行の手口は、確か『武偵殺し』だっけ？」

「模倣犯だろうな。おかげであんな事に・・・・・・」

キンジは苦々しそうに呟いた。

今朝、キンジが始業式に出席しなかったのは、ある事件に巻き込まれていた為だった。

キンジが登校しようと自転車を走らせていたところ、イスラエル製サブマシンガンUZIを搭載したセグウェイに襲われた。しかもサドルの下には爆弾が仕掛けてあり、速度を落とすと爆発すると言う。

絶体絶命かと思われたキンジ。そのキンジを救ったのがアリアであったらしい。

その後で何があったのかはキンジは頑として話してくれないが、どうやら彼の活躍により残る敵も倒す事ができたらしい。

それで今朝の騒ぎである。

話を省略されすぎたため、何がどうなってああなったのか、イマイチ理解が追いつかないが、傍から見ればアリアがキンジの事を気に入ったという風に取れなくもない。

「武偵殺し、か。確かあれって、捕まったんだよね」

「ああ。全く、誰があんな事を」

今回のように、乗り物に爆弾を仕掛けてラジコン無線操縦のマシンガンで追いまわし、最終的には海に突き落とす連続殺人犯。それが一時期、武偵の間で恐怖の代名詞ともなった「武偵殺し」である。しかし、その武偵殺しも今は逮捕、収監されている。つまり、今朝のキンジの事件は誰かがその手口を真似した模倣犯と言う訳である。

だが模倣犯とはいえ、キンジはこうして無傷で生き残っているあたり、流石と言うべきだった。

「ねえ、キンジ。強襲科に戻る気は本当に無いの？」

「無いって言ってるだろ。何度も言わせるな。それに俺は、来年には一般校に転校するんだから」

そう言って、キンジは不機嫌そうに視線を逸らした。

勿体ない。と、友哉は素直に思う。

キンジは本当に強い。入試時の実技試験で教官を倒したと言う事が伝説化しているのは先述したとおりである。その試験と言うのは14階建ての廃ビルに教官5人と多数の受験生を配し、互いを無力化し合うという内容だが。キンジはその教官も含めて全員を倒してしまっている。

まだ中学生の少年が、武偵校の教官、すなわちプロの武偵を倒すなど考えにくい事である。

因みに友哉は、別時間帯の試験に参加し、教官こそ倒さなかったが、他の全員を無力化して合格している。

向き不向きで考えるなら、キンジは間違いなく武偵向きの性格である。その彼が去った今でも、強襲科にはキンジを慕う者が大勢いる。

とは言え、キンジはそう言った空気も苦手らしく、それが彼を孤立させる原因にもなっている。

そんなキンジが武偵校をやめて、一般校に転校する。その理由に関して、彼は一切話してはくれなかった。

キンジと別れ、寮の自室に戻ると、友哉は鞄を机の上に置いて制服のジャケットを脱いだ。

キンジではないが、今日一日で、随分と色々な事があったと思う。

それにしても気になるのは、

「由比彰彦・・・・・・仕立屋、か」

今朝の現場に現われた、仮面を付けた男。

表情の無い仮面の顔を思い出すだけで、不気味な感じがしてしまう。

友哉は竹刀袋に収めている愛刀を取りだすと、鯉口を切って抜き放った。

逆刃刀。

峰と刃が通常とは逆になり、普通に振るっても相手を殺す事無く戦う事ができる。代々、緋村の家に伝わってきた刀である。

友哉は刀を正眼に構えると、目を閉じる。

あの時、対峙した由比に戦いを挑んでいたら、勝つ事はできただろうか？

確証はできない。

あまりにも無防備な動作。まるで殺気と言う物を捨て去ったかのようにふるまっていた彰彦。しかし、そこにこそ、友哉は恐怖心を覚えずにはいられなかった。

一流の狩人ほど、自らの発する殺気を消す事に長けている。彰彦は恐らくそうしたタイプの人間だ。

強敵。

一度対峙しただけで、まだ剣すら交えていないと言うのに、友哉はそう感じずにはいられなかった。

その時、玄関のチャイムが鳴った。

「おろ？」

友哉は刀を鞘に収めると、ソファーの上に置いて玄関の方に向かった。

扉を開くと、そこには幼馴染の短髪少女が立っていた。

「こんにちは、友哉君」

四乃森瑠香は、元気に手を上げて挨拶してくる。

一つ年下の瑠香は昔からの癖で、先輩後輩の間柄になった今でも友哉の事を君付けで呼ぶが、友哉の方もそれを別に咎める気はない。

今年から友哉と同じ東京武偵校に通い始めた瑠香だが、中学３年の時から友哉と戦徒契約を結んでいた。戦徒である戦姉妹、もしくは戦兄妹とは、武偵校の先輩後輩で結ぶ契約の事で、上級生が下級生をマンツーマンで指導する契約であると同時に、何らかの事件の際には共に出動して事件解決に当たる事もある。

元は将軍家に仕えた隠密お庭番衆の末裔である瑠香は、特に諜報活動に長けており、武偵校でも諜報科に所属している。その高い諜報能力を活かし、今朝のように戦場では友哉の目や耳になってくれる事が多い。

「ご飯作りに来たよ。一緒に食べよ」

「いや、あのね、瑠香」

そう言ってビニール袋を掲げる瑠香。中身はどうやら食材のようだ。

ここは男子寮なんだから、ホイホイと来ちゃダメだよ。と、言おうとしたのだが、瑠香はそんな友哉を置いて、さっさと上がり込んでしまった。

「友哉君、あたしが来なかったら、どうせコンビニお弁当とか、そんなのばっかり食べるんでしょ。ダメだよ、それじゃあ」

「い、いや、そんな事はないよ」

と、言いつつ視線を逸らす。

一応、友哉も料理くらいできる。しかし、作るもの全て、栄養が偏ってしまう傾向にある為、瑠香の言っている事はあながち間違いではないのだ。

いそいそとエプロンを着け、食事の準備を始める瑠香。第三男子寮は基本的に4人部屋であるが、この部屋の住人は友哉1人である為、他にキッチンを使う者もいない。ちなみに隣のキンジの部屋も彼1人が使っている。ならばいっそ一緒の部屋にすればいいとも言

われたが、キンジも友哉も1人部屋が良いと申請した為、どうせ部屋が余っているなら、と言う事で学校側から受理された。

「今日は少し和風にしてみようと思うの。友哉君、大丈夫だよね」

「うん、お願い」

偏食する傾向がある友哉だが、基本的に好き嫌いはない。加えて、実家が京都にある旅館である為、瑠香の料理の腕は良い。彼女が作ってくれた料理を不味いと感じた事はなかった。

座って待ってて。と言って料理の支度に入る瑠香。

言われるままにソファに腰掛けようとした。

その時、

何やら隣の部屋から、壁越しにギャーギャーと騒ぐ音が聞こえて来た。

「おろ？」

「何？」

互いに顔を見合わせる友哉と瑠香。

壁越しに音が聞こえるくらい、どうと言う事も無いが、何しろ隣はキンジの部屋だ。彼が1人で騒いでいるとは考えにくい。

2人は恐る恐る廊下に出ると、そっと隣の部屋を覗いてみた。

次の瞬間、

「キンジ、あんた、あたしの奴隷になりなさい！！」

今日転校してきたピンク髪ツインテールの少女が、友人に対してとんでもない事を言い放っていた。

「はい？」

「おろ？」

２人そろって目が点になる。

角度的に見えないが、多分キンジも同じ状態なのではなかろうか。

ただ１人、神崎・Ｈ・アリアだけが、夕日に染まる部屋の中で勝ち誇ったように仁王立ちしていた。

「き、キンジ、何してんの？」

「お、おう、緋村、それに四乃森も」

ぎこちなく振り返るキンジ。

状況がまるで飲み込めない中、遠くでカラスの無く音が空しく聞こえていた。

「何があったの？　ッて言うか、あの子、可愛い」

アリアを見て目をキラキラさせる瑠香。彼女の眼には、アリアが年下の女の子に見えているのだろう。

「ねえねえ、あなた、お名前は？　どこから来たの？　歳はいくつ

？」

「え、な、何よ、アンタ？」

矢継ぎ早に尋ねる瑠香に、アリアは少し顔を赤くして引き気味になっている。

『い、命知らずな・・・・・・』

友哉とキンジはほぼ同時にそう思った。今朝の教室での発砲騒ぎを体験しているから尚更である。

「それでね、それでね、むぐぅ！？」

「よし、瑠香、君はちょっと黙ろう」

瑠香の口を押さえて友哉は下がらせる。

「そ、それで、一体、何がどうなって奴隷な訳？」

とにかく、現状をこれ以上混乱させないためにも、速やかな収集が必要だった。

話を総合するに、アリアはキンジに強襲科に戻って、一緒に武偵活動をする事が望みらしい。

ソファに座って漫画を読みながら、友哉はキンジの部屋でのやり取りを思い出していた。

あの後、アリアとキンジが買い物に出かけたので、友哉達も部屋に戻った。

瑠香はキッチンで夕食の支度を再開している。

それにしてもアリア。目の付けどころが良いのか悪いのか。

物件としてのキンジは、確かに優良と言える。それは去年、何度か一緒に仕事をした事がある友哉には判っている。

圧倒的な戦闘力と状況判断力、それらに裏打ちされたカリスマ性と言うべき存在感は、高校生離れした物を感じずにはいられなかった。

だが、

言いたくはない事だが、今のキンジは去年ほどには武偵に関する情熱を失っているように思われる。

何があったかはキンジは言わないし、友哉の方も聞こうとは思っていない。だが、そこにこそ、キンジが一般校への転校を決めている原因がある事は間違いなかった。

そうしている内に、キッチンの方から良い匂いが漂って来た。

出汁が効いているこの匂いは、煮物か何かを作っているようだった。

「あ、そう言えば、すっかり忘れてたんだけどさ」

「おろ？」

瑠香が手を止めて、友哉の方に向き直った。

その顔が、どこか困惑めいた色に染まっているのが判る。と言うより、少しおびえている様な気がした。

「ど、どうしたの？」

「アリア先輩と、遠山先輩の事、もし『あの人』が知ったら、やばいんじゃないかな」

「ッ！？」

その一言で、友哉も思い出した。

ある人物の事を。

その人はキンジの古くからの友人、所謂幼馴染と言う奴で、東京武偵校の生徒会長も務めている。偏差値低めの武偵校にあって、偏差値７５オーバーの才女であり、茶道部、手芸部、バレー部を掛け持ちし、その全ての部長も務めている。そして、傍から見て判るほど一途にキンジに好意を寄せている。

好意を寄せている。と言えば聞こえは良いかもしれない。だが、彼女のそれは、そんな生易しい物ではない。ハッキリ、自分の全てを捧げていると言っても良いだろう。もし万が一、キンジが彼女に「俺の為に死んでくれ」と言えば、その場で頸動脈に刃を押しあてかねない。そんな存在だ。

思い込みもまた激しい。いつだったか、友哉、キンジ、瑠香の３人でキンジの部屋で食事をしようとした事があったのだが、その際、

友哉が所用で席を外した。つまり、瑠香とキンジが2人っきりになった時に、「彼女」が来てしまった。

その時の光景は、ハッキリ言って思い出したくない。

用事を済ませて戻った友哉が見たのは、破壊し尽くされた部屋の隅っこで膝を抱えておびえている瑠香と、何とか必死に説得を試みているキンジ。そして、般若が一匹だった。

その時の事は瑠香にとってもトラウマになっているらしく、思い出すと今でもガタガタと震えている。

その時だった。

ピンポーン

インターホンが慎ましく鳴る。

このタイミングでこの音。

まさかっ

顔面を蒼白にしながら、友哉と瑠香は顔を見合わせた。

そっと、ドアを開ける。

そこには、予想通りの人物が立っていた。

「あ、緋村君、こんばんは」

清楚な黒髪、精巧な日本人形を思わせる端正な顔立ち。その細い体は今、白い上衣と緋袴と言う巫女装束に包まれていた。

彼女が、先程の話題に上っていた渦中の人物。東京武偵校生徒会長にして、超能力捜査研究科の切り札。そしてキンジの幼馴染、星伽白雪である。

「ほ、星伽さん、どうしたの？」

「あ、キンちゃ、遠山君に筍ご飯作ったんだけど、少し作りすぎちゃって、あんまり量は無いんだけど、緋村君にもおすそ分けしようと思って」

そう言うと、手ごろサイズの弁当箱を差し出して来る。もう片方の手には風呂敷包みに包まれた、恐らくはそちらはキンジにだろう。

「あ、そ、そう。ありがとう・・・・・・」

そう言いつつ、弁当箱を受け取る友哉。その後ろでは引きつった表情の瑠香がお玉片手に立ち尽くしている。

「その、これからキンジの所に？」

「うん。私、明日から恐山で強化合宿だから。今日の内にキンちゃんのお世話、しておこうと思って」

キンちゃん、と言うのは白雪がキンジを呼ぶ時の綽名、と言うよりは癖みたいなもので、キンジからは何度かやめろと言われていたが、白雪としては改めるつもりはないらしい。

「あ、あの、星伽先輩」

「え、何？」

勇気を出して声をかけた瑠香だが、悪意の無い白雪の顔に、言葉が詰まる。

そう、白雪に悪意はないのだ。ただ、キンジに対する思いが少々過剰であるだけで。それは、彼女が生徒会長として多くの武偵校生徒から信頼されている事からもうかがえる。

ただそれだけに、キンジ絡みの事になった時の白雪の暴走を止める事は難しかった。

「い、いえ、何でも、無いです」
「そう。じゃあ、私、行くね」
「あ、ああ、気を付けて、ね」

閉じる扉の向こうに消える白雪を見送りながら、友哉と瑠香はこう思った。

何事も起こりませんように。せめて、こっちに飛び火しませんように、と。

対岸に学園島を臨みながら、由比彰彦は無表情の仮面を闇世の中に浮かび上がらせる。

あの場所は武偵を育成する場所であると同時に、凶悪犯に対する人類最後の希望であると言っても過言ではない。

実際、組織や慣例と言った柵に捕らわれることの多い公的機関に比べて、民間依頼と言う形で行動できる武偵の方が、機動力と言う点で遥かに勝っている。

そんな学園島を眺める彰彦。

その傍らには、小柄な少女が刀を片手に佇んでいた。

「クライアントから連絡がありました。計画を次の段階に移す、と」

彰彦の言葉に、少女は言葉を返さず、ただじっと、手にした刀を抱きかかえている。

その様子に、彰彦は肩をすくめた。

今回の仕事に必要と思って連れて来たが、どうにもよくわからない娘である。

とは言え、彼女の実力の高さは彰彦自身、何度か訓練で手合わせした為知っている。今回は依頼主の支援をするうえで有益である事は間違いないだろう。

彰彦は、更にもう一方に目を向けた。

こちらに立っているのは長身の男だ。短めの髪をボサボサにし、その下にある瞳は、まるでトラを彷彿とさせるようなギラギラとした輝きを見せている。痩せ形の体型をしているが、それが逆に引き締まった印象を与える少年だ。

「あなたも、宜しくお願いしますよ」
「おうよ。大船に乗ったつもりでいろよ」

そう言って少年は不敵に笑う。その荒々しさが、獰猛さを持って存在している。

「さて、こちらの布陣は整いました。頑張ってくださいよ。遠山キンジ君。そして、緋村友哉君」

そう言うと、仮面の奥で不気味な笑みを浮かべた。

第2話「何やら騒がしくなってしまった日常」　　終わり

第3話「お台場にて」

1

基本的に友哉の朝は早い。子供の頃から実家の道場で朝稽古をしていたせいか、毎朝5時には目を覚ましてしまう。

おかげで今のところ、任務以外で遅刻した事は皆無である。何もなければ8時前にはもう学校に来ている。

逆刃刀を収めた竹刀袋を手に教室へと向かっていると、意外な事に自分よりも早く来ていた人物を見付けた。

緑掛かったショートヘアの頭に大きなヘッドホンを付けた少女。体付きは細く、背もアリアとそう変わらない程度だ。その肩には旧ソビエト製セミオート狙撃銃ドラグノフがかけられている。

「おろ、おはようレキ」

片手を上げて挨拶する友哉に、レキはコクリと頷きを返した。

「珍しいね、今日は早いんだ」
「私はいつも、これくらいに来ます」
無表情に淡々と答えるレキに、「そうなんだ」と返す。
レキとは、これまで何度か一緒の任務に就いた事がある。この儚げな雰囲気のある少女は、その外見とは裏腹に校内随一の実力を持つスナイパーである。
通常、狙撃とはプロであってもせいぜい必中距離は1キロ前後とされている。更に腕の立つ人間でも、せいぜい1．2キロが関の山。更に1．5キロ級ともなればもはや怪物と呼んでも差支えない。
その狙撃を、このレキは2キロ以上可能であると言う。まさに神域にいる狙撃兵だ。それ故に「狙撃科の麒麟児」などと呼ばれている。
「前から気になっているんだけど、」
レキと並んで歩きながら、友哉は思い出したように尋ねる。
「いつもどんな音楽聴いてるの？」
レキはいつもヘッドホンを手放さず、何かを聞いている事が多い。耳に音楽を入れる事で、逆に外界の音をシャットアウトし狙撃に必要な集中力を養っているのだろう。と、友哉は解釈している。
だが、

「これは音楽じゃありません」
「じゃあ、何？」
「風です」
レキの返答に、友哉は怪訝な表情で彼女を見る。
対してレキは振り返らずに口を開く。
「気を付けてください友哉さん。良くない風が吹き始めています」
「良くない風？」
一体どういう事なのか。抽象的過ぎてイマイチ要領を得ない。
だが、レキはそれ以上何も語らず、友哉を置いて歩き去ってしまった。

少女はポケットから携帯電話を取り出すと、ボタンをプッシュする。
セミロングの黒髪をショートポニーに結った小柄な少女だ。だが、その少女の手には、彼女の体には不釣り合いな、一振りの日本刀が握られている。
電話を耳に当てると、すぐに相手が出た。
『どうしました？』

「こちらの準備は完了。いつでも行ける」

淡々とした口調で、用件だけを伝える。それだけで相手も了解したのだろう。多くの事は聞いて来ない。

『上出来です。クライアントの方からも準備完了のメールが届きました。彼女の行動開始に従い、私達も動きますよ』

そこで相手は、ふと思い出したように話を切り替えた。

『そう言えば、彼はどうしました？』

彼、という単語が差す2人の共通の人物は1人しかいない。

「出てった。退屈だ、とか言って」

『おや』

多少は予想していたらしく、大して驚いた様子もなく返事が返ってきた。

『ま、良いでしょう。大事の前です。彼にはやりすぎるな、とだけ伝えておいてください』

「ん」

それだけ言うと、電話は切れる。

少女はポケットに携帯電話を戻して歩きだす。

そのまま、人込みの中に紛れるようにして、その小さな体はすぐに見えなくなってしまった。

2

妙な事もある物である。

午後の訓練を終えた友哉は、体育館脇に腰をおろして手にしたスポーツドリンクを煽る。

友哉は深く息を吐きながら、先程見た出来事を思い出していた。

何と、キンジが強襲科に戻ってきたのだ。

あれだけ頑なに強襲科復帰を拒んでいたキンジが戻ってきた事は、喜び以上に戸惑いの方が大きい。

どういう心境の変化なのかじっくりと問いただしたい所だったが、久しぶりに戻ってきたキンジに、彼の潜在的なシンパが群がりもみくちゃにしてしまった為、完全にそれどころではなかった。

その後キンジは、必要な事務手続きを終えて帰ってしまった為、話を聞く事ができなかったのだが、帰り際にピンクのツインテールをした少女と並んで歩いているのが見えた。

そのような特異な髪形をしている人間は、少なくとも東京武偵校には1人しかいない。そこで、大筋の流れは読めた。

「神崎さんもやるなぁ。どんな手を使ったんだろう」

つまり、単純に考えてアリアがキンジの説得に成功したと考えるのが妥当だろう。あれだけ強襲科へ戻る事を頑なに拒んでいたキンジの説得に成功したのだから大した物である。

友哉はスポーツドリンクの入った容器を傍らに置くと、肩の筋肉を回しながらほぐす。

武偵校では午前中は共通の一般教養を学び、午後は自由の時間、つまり、それぞれに依頼を受けて行動したり、戦闘訓練等の専門科目をこなす時間となる。

友哉の武器は傍らに鞘に収めた状態で立て懸けてある逆刃刀一本のみである。

飛び道具全盛の時代に武器が日本刀一本と言うのは、あまりにも無防備すぎる。とは周りから良く言われている事である。事実、武偵校に入学してからも教員から何度も銃火器装備を勧められていた。

だが、今まで剣術一筋で戦って来た友哉は、今更銃を持つ気にはなれない。加えて言えば、身のこなしに自身のある友哉にとって、拳銃は恐るべき武器とは言えない。

先日の大井での戦闘を見た通り、友哉は飛んで来る銃弾の軌道を読む事ができる。

読みの鋭さ、速さは友哉の使う剣術の骨子の一つであり、先の剣を実現する上で重要な要素と言える。

その先読みの早さがある限り、例えマシンガンやアサルトライフルが相手であったとしても切り抜けられる自信が友哉にはあった。

と、その時、体育館の影から走って来る人物に気付いた。

「あ、いたいた、友哉君！！」

四乃森瑠香は、走りながら友哉に手を振って来た。

「ここにいたんだ。探したよ」

「どうしたの？」

荒い息をしながら汗を拭う瑠香に友哉が尋ねると、少し怒ったような視線を返される。

「もうっ、『どうしたの？』じゃないでしょ。昨夜あたしが言った事忘れたの？」

「おろ？」

「今日はお買い物に付き合ってくれるって約束したじゃない！！」

言われて思い出す。

確かに昨夜、夕食を食べている時にそんな約束をした気がする。

「ごめんごめん、すっかり忘れていたよ」

「まったく・・・・・・」

「すぐ着替えて来るから、待ってて」

そう告げると、友哉は刀を取り、急いで更衣室へと向かった。

学園島はお台場からほど近い場所に浮いている。バスに乗れば20分と掛からず街に出られる為、武偵校の生徒は特に娯楽に関しては困っていない。

お台場まで出れば、遊ぶ場所も買い物をする場所も、そして食事をする場所にも事欠かない。

買い物に来た友哉と瑠香もまた、一通りの買い物を終えると通りに面したカフェに入り一息ついた。

「はあ、これで終わりだよね」

椅子の背を預け、友哉はぐったりした調子で尋ねた。

学園島を出てから3時間近く、友哉は瑠香の買い物に付き合ってしまった。

「うーん、できればもう少し回りたかったんだけど、もう時間も時間だしなあ」

時計を確認しながらそう告げる瑠香に、友哉は溜息を返す。

これだけの時間を回ったと言うのに、成果はと言えば殆ど無かった。

服一つ買うにしても、何十分もかけて何着もの服をとっかえひっかえした上げく、結局何も買わずに店を出ると言う事が多々あった。

「まあ、また今度来る事にするよ」

不吉な未来予想図をしながら、瑠香は出されたキャラメルフラペチーノに口を付ける。

そんな瑠香を横目に見ながら、友哉も運ばれてきたコーヒーに口を付ける。

もうすぐ夕食なので、2人とも飲み物以外は頼んでいない。今日も、寮に帰ったら瑠香が何か作ってくれるだろう。

不思議な娘だ、と友哉は思う。

緋村の家と四乃森の家は親戚同士であり古くから交流がある。友哉も幼い頃から瑠香と共に過ごし、彼女を妹のように可愛がってきた

友哉の実家は東京にある。それ故に武偵を志した段階から、両親からは東京武偵校付属中学への入学を勧められ、自分もそれが妥当だと思った。だが、その一年後、瑠香が同じ中学校に入学して来たのには驚いた。

彼女の実家は京都。関西方面にも武偵校はある為、そちらの学校に入るとばかり思っていたのだが、わざわざ寮に入ってまで東京の学校に入って来た理由が、友哉にはイマイチ良く判らなかった。

とは言え、瑠香の存在には大いに助かっている。料理は上手だし、何より昔馴染みで気兼ねなく付き合える異性と言うのはそれだけで貴重だった。

友哉はチラッと腕時計を確認する。

そろそろ帰るバスの時間だ。そう瑠香に告げようとした時だった。

「だから、ちょっと付き合ってくれるだけで良いって言ってんだろうが！！」

突然、店内から大きな声が上がり、友哉と瑠香は恐る恐ると言った感じにそちらへと振り返った。

見れば大柄な男が3人、2人の女の子を取り囲むようにして立っている。

一般高校の制服を着た女の子たちは、男達の迫力に呑まれて震えている事しかできない。その周囲にいる客達も、巻き込まれまいとして視線を合わせない様子だ。

「なに？」

「さあ」

首をかしげる2人の前で、尚も男達が激こうするのが見える。

「おい、テメェ、聞いてんのかよ！！」

「こっち向け。シカト扱いてんじゃねえよ！！」

口々にののしるような事を言う男達に、瑠香は露骨に嫌な顔を浮かべた。

「うわぁ、連中、あれでナンパのつもりなのかな。ダサいにもほどがあるよ」

「こらこら」

苦笑しつつたしなめる友哉。とは言え、彼も同意見なので、強くは言わない。

だが、その一言を男達の内の1人が聞き咎めて振り返った。

「んだと、こらっ、今言った奴出て来やがれ！！」

怒りの矛先が変えられ、他の客達は巻き込まれまいとして黙りこむ。

友哉はフッと一度目をつぶると、腰を浮かしに掛る。あの程度の相手なら刀を使わなくてもノしてしまう事は難しくない。

そう思った時、騒ぎが大きくなると判断したのだろう。店のウェイトレスが立ちはだかろうとした。

「あの、お客様。他のお客様の御迷惑にもなりますので、騒ぎの方はご遠慮ください」

勇敢な行動と言える。今日日、騒ぐ相手にこうまで敢然と立ち向かえる一般人などそうはいないだろう。

だが、同時に無謀でもある。彼女の行動は言うならば野犬に聖書

を言い聞かせるような物だった。
「うっせい、邪魔すんな！！」
「キャァッ！？」
殴られよろけるウェイトレスの少女。
あまりの事態に、流石に客達がざわめいた。
友哉と瑠香も、腰を浮かせる。
だが、それよりも早く、倒れるウェイトレスを支える影が合った。
「おいおい、こんなトコで暴れる前に周りをよく見ろって。あんたら、自分が随分格好悪いって気付いてないのかい？」
低いが張りのある声が発せられる。
支えられたウェイトレスが見上げるくらいの背丈のある少年が立っている。ボサボサの髪に、ギラギラした雰囲気の瞳を持った少年だ。まるで肉食系の猛獣を思わせる。
「んだと、この木偶の坊が！！」
「粋がってんじゃねえぞコラッ」
口々にののしる男達を余所に、少年はウェイトレスを気遣うとうっとうしげに向き直った。
「やれやれ、騒ぐ事くらいしかできねえのかよ、あんた等は」
「んだと！？」

尚も激昂しようとする男達を冷ややかに見据え、少年は顎をしゃくった。

「ここじゃ何だ。表に出な。そこで相手してやるよ」

どうやら少年は、1人で3人叩きのめすつもりでいるらしい。見たところ武偵ではないようだが。

だが、少年が店の外に出ようと踵を返した瞬間、

男の内の1人が、ニヤリと笑みを浮かべたのが見えた。

その光景を、友哉は見逃さない。

腰だめに拳を構えている。その手に一瞬、銀色の光が奔った。間違いなく刃物の類である。

次の瞬間、

友哉は袋に入ったままの刀を鋭く下から上に振るった。

「なっ！？」

手元を駆け抜けた衝撃に、男は思わず動きを止める。

一拍置いて、天井付近までは跳ね上げられたナイフが回転しながら床に転がる。

動きを止めた男を、友哉は刀を下ろしながら鋭く睨みつけた。

「それはいただけないな。それ以上やるって言うなら、僕達も黙っている訳にはいかないよ」
「テメェ、このやろ・・・・・・ゲッ」

友哉の、そして瑠香の着ている制服を見て相手が誰なのか判ったのだろう。男は言い掛けた言葉を引っ込めて震えだす。

武偵の戦闘能力は、世間一般にも知られている。今だ学生の身分であるとは言え、強襲科の武偵1人で街のごろつきぐらいなら最低でも10人くらいなら普通に相手取れるほどだ。

「で、どうするの？」
「クソッ、おい、行くぞ」

武偵相手に喧嘩をする事の不利を感じたらしく、男達はすごすごと店から出ていった。

それを見て、少年は友哉達に向き直る。

「やるねえ、あんた。流石武偵だよ」
「余計な手出しだったかな？」

そう言って互いに苦笑する。

友哉の見立てでは、目の前の少年ならあの程度の相手は物の数ではなかっただろう。多分、3人同時に相手にしても負ける事は無かったのではないだろうか。そう言う雰囲気を持つ少年だった。

「ま、売られたケンカは買うクチだが、余計な手間が省けるなら、

それに越した事はねえさ」

そう言うと、先程殴られたウェイトレスに向き直った。

「大丈夫かい？」

「あ、はい。ありがとうございました」

そう言って頭を下げるウェイトレスに笑い掛けると、少年は無遠慮に友哉達の座っているテーブルに相席してきた。

「全く、ああ言う奴等が最近増えて来て困るな。なあ、あんたら武偵なんだろ。ああ言う奴等、取り締まらねえのか？」

「武偵は警察じゃないからね」

そう言って友哉は苦笑する。

そもそも武偵が活動するにあたっては、普通の探偵と同じく依頼を受ける必要がある。つまり、依頼が無い介入は武偵の意に反すると言う事である。勿論、今回のように目の前で起こっている事を座視するのは単なる阿呆の所業であるが。

警察よりもフットワークが軽い半面、このようにストイックな掟に縛られているのもまた武偵である。

「武偵ってのも厄介な存在なんだな。もっと気楽にできねえもんかね」

「そんな事言ったって仕方ないじゃん。それが決まりなんだし」

瑠香が少し口を尖らせて言う。何やら、断りも無く座って来た少年が面白くない様子だった。「折角2人っきりだったのに、デート

だったのに」などとぶつぶつ言っているようだが、友哉達には聞こえていない。

だが、そんな事には構わず、少年は口を開く。

「おっと、そう言や、自己紹介がまだだったな。俺は相良陣。また顔合わせる機会があったらよろしくな」

「僕は緋村友哉。こっちは四乃森瑠香」

「・・・・・・よろしく」

瑠香は相変わらずそっぽを向いたまま挨拶する。

「緋村に、四乃森ね。よっしゃ憶えたぜ。何か困った事があったら、この界隈で相良って言えば誰でも判るから。いつでも尋ねて来てくれや」

そう言うと陣は席を立って店を出ていった。

「何だか面白い人だね」

「そうかな、ただ単にむさくるしいだけのような気もするけど」

ブウ垂れたまま答える瑠香に、友哉は苦笑しながら頬をツンツンと指でつつく。

「やめてよ」

そう言いながらも手を払おうとしない瑠香を、友哉はニコニコしながら頬をつつく手を止めない。

その時、先程のウェイトレスが歩いて来た。

「あの・・・・・・」
「ああ、そろそろ、僕達もお暇するから会計の方をお願いします」
「その、会計の事なんですけど、先程の方と含めて７４００円になります」
「おろ？」「はい？」

２人の目が点になる。

「ちょ、ちょっと待って。何であいつの分まであたし達が払わなきゃいけないの！？」
「はい、あのう、お知り合い、なのでは？」
「完全無欠で初対面よ！！」

とは言え、払わないと店の方でも困る訳で、

友哉はそっと溜息をつく。

どうやら、帰りは徒歩になりそうだった。

陣は裏路地を歩きながら、笑みを浮かべていた。

なかなかどうして、武偵にも面白い奴等がいるようだ。しかも、年齢的には陣とそう大差ないように見えた。

実際に戦ってみたらどちらが強いだろうか。そう考えると、陣の

心は躍った。

勿論、陣に負けるつもりはない。だが、とても楽しい喧嘩になりそうだった。

と、その時、上着の内ポケットに入れていた携帯電話が振動する感触があった。

「・・・・・・おう、俺だ」

『私です。今、どちらに？』

相手は、今回の仕事の雇い主だった。何でも何処かの組織の構成員で、他の人間の計画を援助するのが役割であると言う。

胡散臭い男だが、楽しい戦いができそうだと思ったので乗って見る事にした。

『明日です』

その一言が、全てを物語っていた。ついに、動く時が来たのだ。

「やっとか。随分待たせてくれたな」

携帯電話を片手にしゃべる陣を、背後から見据える3対の目があった。

「おい、本当にやるのかよ？」
「ったりめーだろ。このまま舐められたままで良いのかよ」
「大丈夫だって。相手は１人だ。３人で背後から掛かればちょろいって。それに、これだってるだろうがよ」

そう言ってちらつかせたのは、先程友哉に弾かれたのとは別のナイフだ。刃渡りは１０センチ長。刺されば確実に内臓を傷付け、相手を死に至らしめる武器である。武偵のように防弾服を常時着用しているならともかく、相手はただの一般人。これで先程の憂さを晴らすのだ。

「行くぞっ」

声をかけると同時に、３人は物陰から飛び出し、陣の背後から襲いかかった。

『どうしました？』

陣の声が途切れた事に不審に思ったのか、相手が気遣うように尋ねた。

ややあって、陣も答える。

「・・・・・・・・・・・・いや、何でもねえよ。それより、俺は予定通りの行動で良いんだな？」
『はい。実際に戦うのは「彼女」ですから。私達が依頼されている

のは「余計な連中の排除」だけです』
「判った。じゃあな」
そう言うと、陣は携帯電話切って路地裏を後にする。
後には、襤褸切れのように成り下がった男達が、冷たい地面に転がっているだけだった。

3

翌朝、友哉は瑠香と並んで歩きながら、昨日の事を思い出していた。
結局、あの後、3人分の食事代を払った友哉と瑠香の財布には、殆ど金は残らなかった。
それでもどうにか、瑠香だけはバスで帰らせる事ができた。瑠香は一緒に歩いて帰ると言ったが、武偵とは言え女の子をお台場から学園島まで歩かせる訳にはいかなかった。
そして友哉はと言うと、実に男らしく歩いて学園島まで戻った。

断わっておくが、友哉は運動神経には優れている方だが、決して体格的には恵まれている訳ではなく、ハッキリ言って線の細い体型だ。お台場から歩いて帰って来るのは骨であった。

「そう言えば、友哉君。今日の午後暇？　久しぶりに稽古付けてほしいんだけど」

「ああ、そうだね」

徒友契約した学生は下級生に対し、上級生が指導すると言う義務がある。戦兄である友哉は、当然、戦妹の瑠香を指導しなければならない。諜報科の瑠香だが、戦闘力の強化維持も行いたいと言う理由で、中学の頃からよく友哉に稽古を付けて貰っていたのだ。

そうしている内に、2人は捜査に使う乗り物が格納されている車輛科倉庫の前に通りかかった。

その時、友哉の携帯電話が鳴った。

「もしもし？」

『あ、友哉、アンタ今どこ！？』

「おろ、アリア？」

意外な相手だった。確かに、アリアとは先日携帯番号を交換したが、まさか掛けてくるとは思っていなかった。

「今は・・・車輛科の倉庫前だけど」

『なら、ちょうどよかった。そこで何か乗り物見繕って、今すぐ強襲科まで来てくれる。アンタの特性なら、そうね・・・バイクとかが良いわ』

「ど、どういう事？」

いきなりまくしたてられて、友哉も困惑したまま聞き返す。

そんな友哉に、アリアは一方的に告げた。

『手伝って。事件よ』

第3話「お台場にて」　　終わり

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n7348z/

緋弾のアリア　～飛天の継承者～

2011年12月25日21時48分発行